

特集

病院図書館員の専門性と役割

病院図書室と司書

中山雅弘

1. はじめに

私が病院図書室として知っているのは、大学図書館が2カ所、横浜の小児病院の図書館とロンドンの総合病院（大学病院に近い）、それと現在の勤務先の図書室である。

私は現在の病院で検査室の仕事をしている。専門は病理医であるが、検査に関連する仕事もしている。元々は、小児科医として臨床を行っていた。このような経歴からか、ひとつの専門的な雑誌を継続的に読むものは少なく、臨床系の雑誌に載っている病理学的なことや病理系に雑誌に載っている臨床的なことを読むことが多かったように思う。

以前勤務していた病院で、当時の副院長の先生を、毎日朝8時から9時まで図書室で見かけることが多かった。「仕事があるのでこの時間だけは図書室にこまれるのです」と言っておられたことを思いだす。

2. 司書の仕事について

司書といえば、病院のすべての職員から慕われていたK病院のYさんや、ロンドンの病院図書室で、長身でハンサムな男性司書が、丁寧だが威厳のある態度で医師と接していたことを思いだす。なぜ、欧米の図書館の司書はあのように威厳があり貫禄があるのだろうか

か？どうも図書館というものに対する考え方が、欧米の人たちと日本人との間にギャップがあるように思われる。かくいう私も、子どものころから本は買って読むことが多く、図書館はあまり利用しなかった。実際に、立派な図書館も存在していなかったように思う。どちらが先かという卵か鶏かのような議論になるが、やはり図書室には、個人では買えないような、しかも魅力的な本を整えることが基本である。そのようないわば、ハードな条件の設定とともに大事なのが、司書というソフトな部分である。

病院には司書がいなくて、事務の人が代行しているところも多い。司書の仕事はもの管理だけではない。最も大事なことは、ユーザーの多数が満足できる環境を作ることであろう。文献の依頼があればそれに対応し、また大声をあげて他人に迷惑をかけるような利用者を叱責することも仕事であろうと考える。

以前、横浜にいたころの話だが、職員の1ポストを削っても司書は配置すべきだよと尊敬する上司から聞いたことがある。カルテがあれば診療録管理士が不可欠のように、図書室があれば、司書は必要なのである。

私の病院の図書室を利用して、図書がきちんと整理されていたり、ラベルなどを見るとああやはり専門の司書がわが病院には居て仕事をしてくれているなど感じることもある。事務の人が代行している病院ではなかなかうまく整理はできていないと思う。

なかやま まさひろ：大阪府母子保健総合医療

センター 検査科部長

3. 図書と他の情報メディアについて

私は、自分自身でも活字人間だろうと思っている。学生時代は演劇に関係していたり、映画も年を経るほどにマニアックになりつつあるが、やはり本はいつも手元にあった。人と待ち合わせをしても、本屋で待ち合わせをすれば、1時間程度は待ち人が遅れても時間がつぶせる。ラジオやテレビが普及しても、私たちの世代は、活字ばなれはしなかったように思う。

ところが、ここ10年ほどの間に大きな変化が起きた。それは言うまでもないが、コンピュータの登場である。コンピュータのその可能性はとてつもなく大きいもののように思われる。インターネットの世界を考えていくと、これは活字と映像の両者を吸収していくものなのかもしれない。

病院図書室における本と他のメディアについても、以前は文献検索でも、英文と和文の専用の二次資料があり、小さな活字を各年度ごとに Index Medicusなどで調べていた。それが最近ではCD-ROMによる検索、更にはインターネットによる文献検索は瞬時とってよいほどの短時間で個人が行えるようになってきている。しかし、誰もが個人でインターネットを使えるわけではない。病院図書室でのインターネットを利用した文献検索も司書の仕事としてとらえていただきたいと思う。

また、図書室に無い文献については、現在は司書にお願いをして図書室間の相互援助システムを利用して入手したり、また専門の業者もある。しかし、これもインターネットで個人が簡単に手に入れられる時代は近いように思われる。

ビデオなどの映像も、特定の領域では大人気である。病院図書室でもビデオ関連のものも司書の仕事と考えるべきでしょう。

このように書いてくると医学雑誌や単行書が不要になってくるのではという意見があるが、おそらく本というメディアは手軽さや内容の豊富さの点で、他にあって変わることが

できないものがあると思う。映像文化で育った世代が青年・熟年となっている。しかし、やはり本は永遠なりという思いは強い。

4. 病院図書室の方針

私は現在の勤務先で約15年間、図書委員会に深く関わってきた。従って、ユーザーの代表的な、あるいは平均的な意見からはややはずれるかもしれないが、病院図書室の方針といったものの私見を述べてみたい。

病院の図書室は、いかに大きくても大学医学部の図書室にはかなわない。従って網羅主義よりも機能主義の方がよい。例えば、立派なシリーズの本があってもその中の特に病院の特徴と関連する巻のみ購入するといったことである。私の病院は母子保健の病院と研究所を備えたセンターである。従って、産科や小児科（外科系のもので小児版が中心）ということになる。

当初の問題点は年間予算のうち、雑誌と単行本をどのような比率で購入するかということであった。初代図書委員長（前院長）の構想で、年間予算の8割を雑誌にあてることにした。その後、病院の規模が大きくなったり、職員数も大幅に増加しても図書の予算はほとんど増額されなかったため、現在では、年間予算の100%を雑誌購入としているが、それでもこれまでのものを継続購入できないという事態が起こっている。とはいえ、当初からの方針は正しかったと考えている。先にも述べたように、病院図書室に病院のために役立つという機能性を重視しなければいけない。当病院は専門病院で、専門的な医師やメディカルの人たちが集まってきている。このような人たちは、大部分は教科書に記載されているような基本的な診断法や治療法は習熟しているはずである。必要とされるのは最新の情報である。そのためには、雑誌重視が基本である。

開館時間は、これまでに何度も検討された課題である。司書の勤務する時間帯のみ開館

するということでは、ユーザーは非常に困る。当病院のように昼夜の区別なく患者診療を行っているところでは、夜間・休日に閉館することはできない。しかし、問題は開館時間を広げると本の紛失率が非常に高くなる。結局、24時間利用可能な形で、本の紛失に関してはユーザーの良識に期待するしかない。

閲覧室は広く持ちたいものである。ビデオなどのブースもほしい。文献検索が行えるコンピュータの端末も置きたい。現在のわが図書室は、残念ながら理想とはほど遠い。以前の病院の図書室はかなり満足なものだっただけに余計に痛切に感じる。

5. 医学関連の書店について

病院の限られた年間予算で、どのように安くたくさんお本を購入するかは、実は非常に大事なことである。外国雑誌を購入する場合、図書室などの公的機関と個人購入とでずいぶん値段が違うことに驚かされる。個人にとっては有利なことではあるが、図書室の購入に関与していると、そこまで差を付けなくともという気がしないでもない。また、外国雑誌の購入に代理店価格が存在することであ

る。円高であろうとほとんど還元がなく、円安になると価格が跳ね上がるように思う。


近年、正当な交換価格+マージンで取引をするという外資系の会社が活躍している。契約を早くから始めなければいけないとか契約条件が外資系では複雑になるなどの問題点もある。より合理的なシステムが望ましい。

6. おわりに

専門職としての病院司書についての特集で、私に書くべく期待されたことはもっと専門職種に対する意見や体制的なことであったのかもしれないが、雑感といった文章になってしまった。

病院図書室は医師・看護婦・薬剤師・検査技師・放射線技師や、その他いろいろな人たちが利用している。病院の活動を支える部門のすべてに関わっている。また、意外と知られていないことではあるが、病院機能評価の中には、図書室の充実がそのひとつとして記されている。

病院図書室を使いやすくするために、日々努力しておられる司書に対して感謝の気持ちをこめ拙文を終えたい。



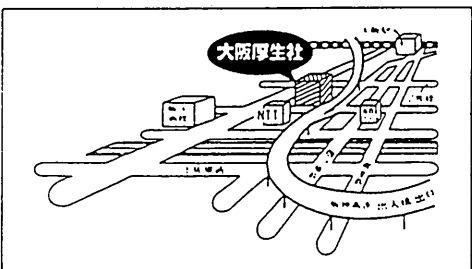
Since 1946

■鮮度のいい情報を大量にストック

メデイカル情報発信基地!

月刊医学情報 医学関連記事を全国21紙より抜粋(年間購読料22,000円)

- TOKYO □(03)3294-0021
- YOKOHAMA □(045)243-0181
- KANAZAWA □(0762)64-0791
- SHIGA-DAI □(0775)48-2091
- TOYOAKE □(0562)93-1821
- KYOTO □(075)761-2181
- MORIGUCHI □(06)992-1051
- TAKATSUKI □(0765)63-1161
- KINDAI □(0723)66-0221
- WAKAYAMA □(0734)33-4751



大阪厚生社 本社 〒530 大阪市北区堂島3-2-7 ☎(06)451-3711 Fax.(06)452-5080